



### 寄贈資料の中から 鍛冶屋の道具

鍛冶というのは、鉄を熱して打ち鍛え、農具や刃物などを作ることです。主な製品としては、農具では鋤くわや鋤すき、刃物では鎌、鉞、斧などがあげられます。

鍛冶の作業は親方と弟子1～2人で行います。炭は松を使います。原料は鋼鉄はがね (刃金) と軟鉄じがね (地金) で、これらを熱して鍛接し、打ち延ばして成形、焼き入れ・焼き戻しをしたのち、研磨をして仕上げます。

金属を高温で熱し、水または油に入れて急速に冷やすと硬度が増します。これを焼き入れといいます。これにより硬化するのは刃金で、地金は硬化しません。性質の異なる鉄が接合されると、鋭利さと強度が得られます。

フイゴは、炉ひどこ (火床) の火力を強めるために空気を送り込む装置です。箱の中にピストンが内蔵されており、取っ手を押し引きすると風が送られるしくみです。この押し方により、必要な風の量を調整することができます。また、内部のピストンには狸の毛皮が貼られ

ています。狸の毛皮を使うのには二つ理由があり、一つは毛が抜けにくいいため、もう一つは、ピストンがフイゴの内壁に密着するので機密性が保たれるためです。

ヒバシは鉄を挟んで持つもので、鉄を炉に入れたり、金敷かなしきの上で打ったり、焼き入れをする際に欠かせない道具です。製品の種類に応じて、挟む部分の大きさや形状が違います。

鋨は、熱した鉄の打ち延ばしをするもので、大きいものは大鋨むこうづち (向鋨) といって、先手さきで (弟子) が使われます。小さいものは小鋨といって、親方が先手に「叩け」と合図をしたり、細かな調整に使います。

タガネは、焼いた鉄を切断するためのもので、大鋨でタガネを叩いて切ります。

金敷は、熱した鉄を打ち鍛えるための台です。打つ時の衝撃に耐えられるように、台の下の大部分が木の根や地中に埋められます。

## 駿河湾の漁

## 後藤正光さんの漁話

## 延縄釣漁の話

〈林屋丸の漁〉

私の父は、明治の終わりごろから大正時代に、幅が3～4尺（約90～120cm）程度の小さな帆船で、紀州まで行ってマグロナワ（マグロ延縄）をしたそうだ。その頃の道具が家に残っていた。

終戦直後には、家の船（林屋丸）は5馬力ほどの焼玉エンジンを積んだ2～3トンの船だった。当時は復員して仕事の無い人が大勢いたので、そういう人たちが4～5人一緒に船に乗った。その頃の我入道では、テンマ（伝馬船）の衆は小さな魚を釣り、うちのような中型の船はサメやマグロの延縄をやった。

私は昭和24年に学校を出て、25、26年と家の船に乗り、延縄釣漁やテジ（手釣り）、竿釣り、突きん棒など様々な漁を経験した。延縄釣漁では6人乗った船でマグロやシイラ、アオザメ（ヨシキリザメ）、カジキ、クロザメ、それからハモなどを捕った。林屋丸は昭和20～23年にイワシを餌にメジナワ（メジマグロ延縄）をしたが、イワシが捕れなくなってやめたため、私はあまり経験がない。

時期によっていろいろな漁があったが、使う道具はみな手間をかけて自分たちの手で作ったものだった。



麻糸のメジナワ 木綿布の中におが屑とツリが入っている

## 〈延縄釣漁の方法〉

延縄釣漁には、ツリ（釣針）に餌を刺しながら、縄籠（かご）に入れたミチナ（幹縄）を順に海へ落とす人と、モンゼン（浮標旗）を投げる人と、舵（かじ）を持つ人とで、少なくとも3人が必要だった。

例えばマグロナワならば、360尋（約540m）のミチナの入った籠を30繋（つな）げて使うので、総延長は10,800尋（約16.2km）にもなった。1籠分のミチナの端には、ミチナを吊り上げるウケナ（浮縄）が付き、ウケナの先に浮きとモンゼンをつけて、1籠ごとに目印として浮かべた。ウケナはマグロナワだと10～30尋（約15～45m）の長さがあり、この長さがナワ（延縄）を仕掛ける深さになった。1籠には6本のヒ

ヨ（枝縄）と、その先端にツリが付くので、漁の直前に200～250位の数の餌を釣った。餌のイカやサバはカメ（魚槽）に生かしておき、6本×30籠＝180個のツリに付けながら、南西の方角へ向かって真っ直ぐにナワを落としていった。余った餌は途中でコマシ（撒き餌）にした。細かく切ったりせずに、生きたままナワの上へ投げ入れた。

夜明けにナワを落とし、昼前には上げた。

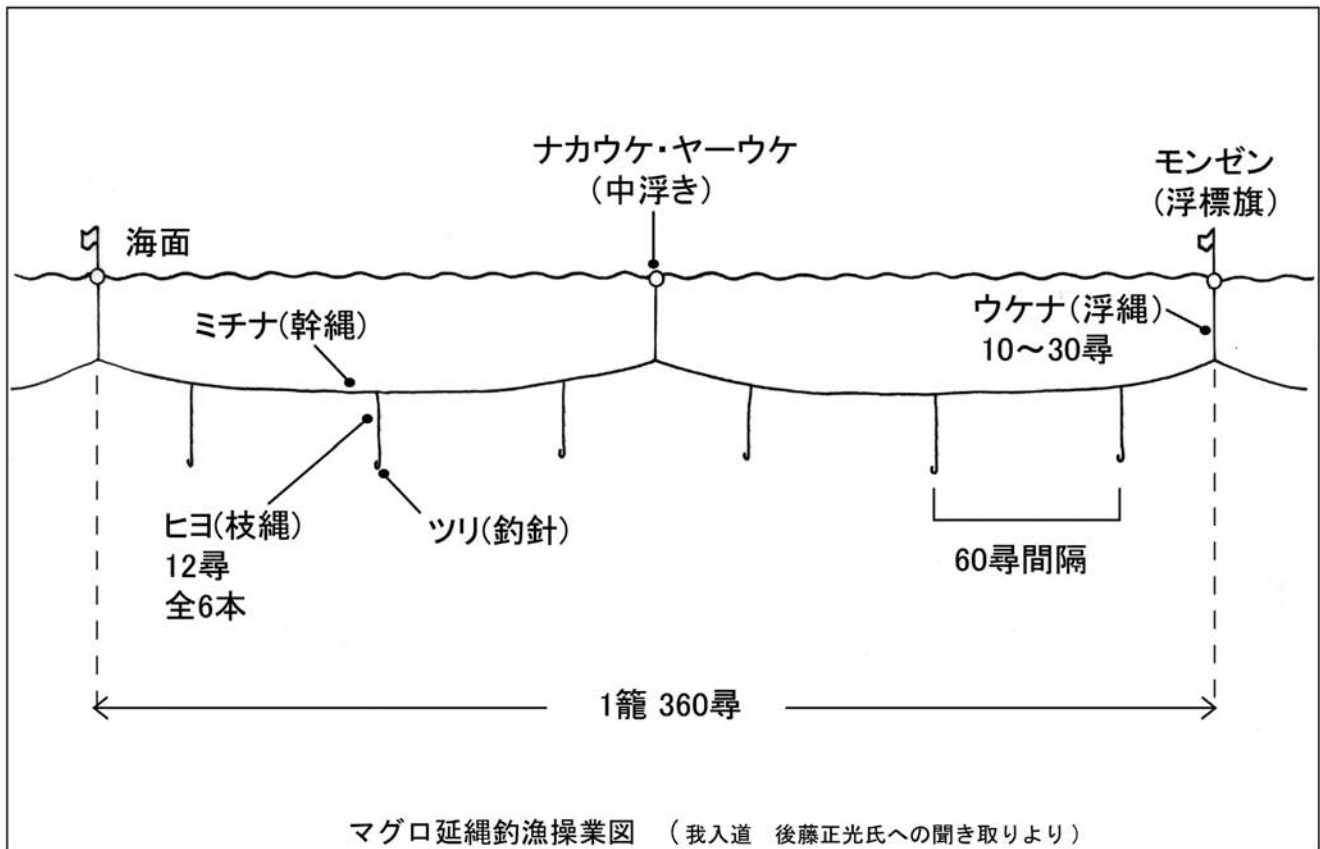
## 〈延縄釣漁の時間〉

マグロナワでは、船で午前10時ごろ出かけて夕方子浦沖に着き、夕方から夜中過ぎまで餌のイカやサバを釣った。そのまま今度は沖へ向けて3時間くらい走って、その間は餌をつけたり、ミチナを繋いだりしたので、寝ている暇が無かった。縄籠を30枚も積むと船がいっぱいになり、乗員全員が横になって休むことは出来なかった。夜明けに漁場の青根へ着きナワを仕掛けると、交代で仕掛けの状態を見て回った。魚がかからないと餌を捕りにもどり、近くの港へ碇（いかり）を打って仮眠をして、何日も漁を続けたので、寝不足の漁だった。

また、メカジキやクロザメ、ハモは夜縄（よなわ）だった。メカジキは9～11月の月夜に漁をし、クロザメは同時期の闇夜に漁をした。夜縄では、ミチナの先端に浮標灯（ひょうとう）を立てた。カーバイトやバッテリーを利用した灯りに浮きが付いたもので、これを中心に縄の一番先頭か、一番尻のところで時間待ちをした。ナワを仕掛けてから1～2時間は、この灯りを見失わないよう、船は近くにいないといけな。そういう時、風が弱いと私が1人で漕がされた。待っている間は燃料の油がもったいないから、小僧だった私が海流に流されないように櫓（こ）を漕いだ。居眠りをして流されて「どこいくだ」なんて言われ、違うほうへ漕いだこともあった。風が強くなるとエンジンをかけるので、風がふわふわ吹くと「もっと吹かねえかな」と思った。2～3時間櫓を漕ぐが、その間大人たちは船の中で寝ていた。浮標灯の周りから離れなければいいが、がんばって一生懸命漕いで、仕掛けたナワを引っかけても良くない。小僧は大変だった。



浮標灯 ガラスの浮きがつき、先端のランプが灯る



〈ナワをとられる〉

仕掛けたナワの途中を大きな船が通って行って、スクリューに巻かれてモンゼンをとられたり、ミチナが切れたりすることもあった。ナワが切れたときは、モンゼンがところどころ立っているのを探してつかまえた。探して走るとどこかは浮いているので、両方から引っ張って繋げた。

マグロナワの餌をサメが食って、全部沈んでしまったことがあった。籠で30枚もナワをやって、1籠半くらいしか戻ってこなかった。サメがかかって餌を全部食い、死んでナワといっしょに沈んでしまった。そんなことも1回あった。一日中探し回ったけれど、見つからなかった。また逆に、マグロが1匹かかると3籠分のナワが沈んだ。マグロはそれくらいに大きく力が強い。また値もいいので、見回りをして1匹でもマグロがかかっていると、大漁旗を揚げて帰った。

〈延縄釣漁の道具〉

捕る魚によってウケナの長さを変え、ミチナにつけるヒヨの間隔を広めたり狭めたりした。ミチナはいつも三色の太さの準備があったが、1種類を複数の漁に使うこともあった。底魚はそんなに泳がないので、ヒヨが短く間隔は狭い。逆に浮き魚など足の速い魚は、ヒヨは長く間隔を広く取らないと、かかった魚が泳ぎまわってヒヨ同士が絡んでしまう。

またヒヨはセギビヨといって、魚によって太さや長さを変えて丈夫なワイヤーのようなものを作った。

シラソという上等の麻を緩めに太く撚って、それを木綿糸で巻いた。フールという道具を使い、家の中に張った麻撚り糸に、隙間のないよう固く木綿糸を巻きつけた。ワンヤ（鋼のワイヤー）は昭和24年頃には出てきており、これも巻いてセギビヨにした。細いセギビヨはシイラ、太いのはカジキ。マグロは力が強いのので、いちばん頑丈にした。

底魚の場合は、細いナワでも手間がかかった。深いところでは500mもの海底までナワを沈めるために、千本浜で形の良い石を拾い、竹の股を石に縛って錘をつくる作業があった。そうした漁ではウケナを引き上げるのにも、朝の6時ごろからお昼頃までかかった。手に布で作ってもらった指サックをはめて、2人ぐらいで「よいこら、よいこら。」と引き上げるが、指が平らになるほど重たかったし、魚がかからないとさらに重たく感じたものだった。

昭和24年頃は、ナワ（延縄）の素材は手撚りの麻縄から配給の木綿縄に変わっていく時期だった。それでも今の化学繊維と違い、濡れっぱなしにすると腐ってしまうため、手入れが大変だった。漁を終えると、移動する船の中で絡んだナワをほどき、一度漁へ行ってくると干して乾かした。そして1週間に1回とか10日に1回ぐらい、杉皮を煮出してナワを染めた。染めると水切れがよく乾きやすくなり、何度も同じナワを染めて使った。

（話：後藤正光氏 沼津市我入道在住）

## 資料館からのお知らせ

### 国指定記念特別展を開催しています

歴史民俗資料館では、「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」の重要有形民俗文化財指定を記念して、特別展「大漁満足－駿河湾の漁具コレクション－」を開催しています。



魚群を見張る魚見小屋の様子

駿河湾に押し寄せてきたマグロやカツオ等の群れを、入り組んだ地形を利用して網で建切、浜に追い込んだ建切網漁。

漁師の副業として盛んに行われ、浮世絵にも描かれた鰹節作りなどの水産加工用具、コショウバイ（個人操業）で使われた漁具、漁の安全と大漁を祈願する船霊様など、重要有形民俗文化財 131 点を始め貴重な資料を多数紹介しています。



コショウバイに使われたマグロの延縄

10月10日(日)の午後1時から2時には、学芸員によるギャラリートーク（資料説明）を行います。全国に誇る沼津市の宝を是非ご覧下さい。

### 国指定文化財で授業が行われました

今は使われていない漁の道具なのに、なぜ文化財として残さなければならないんだろう。

7月5日、このことを考えようと第三小学校で行われた授業に当館の学芸員が出席、「昔の道具は残っているものも少なく、今では作る人もいません。どのように使われていたのかを皆さんに伝えるため、文化財に指定して残しています。」と、文化財保護の重要性を説明しました。



学芸員の話真剣に聞く児童

### 体験学習・漁具製作実演

歴史民俗資料館では、国指定記念特別展に併せて次のイベントを開催します。会場はいずれも歴史民俗資料館1階ロビーです。

・「体験学習 網袋を作ろう」

11月6日(土)午後1時から午後3時

ボールで小さな網袋(網の浮き入れ)を作ります。出来上がった網袋は、お持ち帰り戴きます。(材料が無くなった時点で終了します)

・「漁具製作実演 モジリを作る」

11月14日(日)午後1時から午後3時

モジリ(魚のワナ)作りの実演をご覧戴きます。

#### 沼津市歴史民俗資料館だより

2010.9.25 発行 Vol.35 No.2 (通巻187号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷 2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/rekimin/index.htm>

E-mail: [cul-rekimin@city.numazu.shizuoka.jp](mailto:cul-rekimin@city.numazu.shizuoka.jp)